

一編の映像詩のよう

中野 理恵

セノーテとはメキシコ、ユカタン半島に点在する洞窟の中にある泉の呼称である。マヤ文明期には貴重な水源でもあり、雨神〈チャーク〉のために生け贄が捧げられた言い伝えが残っているようだ。

映画『セノーテ』は、本作の小田香監督自らが、セノーテに潜り撮影した映像で構成され、音楽はなく、セリフも少ないのだが、思わず見入ってしまう魅力溢れる作品であり、一編の映像詩のような印象も抱いた。生誕して120年以上を数える映画ではもう新しい表現は不可能、との従来の言説を覆すような作品、とも思う。

ブクブクと水音がひっきりなしに画面に流れる中を、幾条もの光が斜めにセノーテの水に差し込む。魚がゆっくりと泳ぎ、地上の音だろうか、こだまが響く。水滴が落ち、はねた水がカメラにあたる。現地のであろう男女が、じっとカメラを見つめる表情が、映画の随所に挿入される。深く^{しわ}皺が刻まれた顔、赤く唇を塗った顔、いずれも焦げ茶色に日焼けしている。誰もがじっとこちらを見つめるだけで何も語らない。時折、カメラは地上に出る。青々と茂る草、岸の畔に立つ十字架、村のお祭り、少年が広場の柵の間から覗く歓声の聞こえてこない闘牛場の、少なさそうな観客の前で、あまりやる気がなさそうに闘牛を演じる男や牛の姿、盛装してダンスに興じる男女。今も続くユカタンの人々の暮らしであろう。時折、セノーテにまつわる出来事や伝説が、囁くように語られる。

「あぶくが上昇し、水中に人を連れていく」「泡と水が人を引っ張る」「セノーテの近くに住む人が赤子に乳をあげ、赤子が寝ている間にセノーテに行き、帰らなかった」等々。何を伝えたいのか、と考える間もなく、画面に吸い寄せられてしまう。不思議な魅力に溢れている。画面に撮られるのは



©Oda kaori

悠久の時なのか、現実なのか、あるいは…。

どのようにして撮影したのだろう、最初に湧いた疑問であった。調べると、泳げなかった小田監督は練習し、シュノーケルをつけて水中撮影したそうだが、〈伝説の泉〉に潜るのは怖くはなかったのだろうか、と次の疑問も湧く。

映画の製作は、誕生以来長いこと重い機材(=男性でないと不可能)と、大勢のスタッフ(=統率力は男性が有している能力と思われていた)を必要とするため、レニ・リーフェンシュタール^{*}のような僅かの例外を除き、男性に独占されていた。だが、撮影機材が簡便になり、一方で、サッチャーやメルケルを始め統率力のある女性が登場し、いずれも過去のものとなった。それは、映画製作が女性のものにもなったことを意味する。

なお、小田監督は〈映画の未来を拓き、世界へ羽ばたこうとする若くて新しい才能に贈る〉をテーマに創設された〈大島渚賞〉を、授与されている。1987年生まれの小田監督の今後に期待したい。

^{*}ナチ党大会の記録映画『意志の勝利』(1935年)、ベルリンオリンピックの記録映画『民族の祭典』『美の祭典』(1938年/ヴェネツィア国際映画祭最高賞)等で知られるドイツの映画監督・写真家。

《Cinema Information》

『セノーテ』

メキシコ・日本映画(75分)

監督:小田香

9月19日(土)より新宿K's cinemaにてロードショー

なかのりえ:映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館,2018)等。